

日本の意思決定とシステムの発想

松田 武彦

序 論

ひと口に組織における意思決定支援システム (decision support system; DSS) といっても、定型的 (programmed) ないし管理的 (administrative)・業務的 (operational) な意思決定と、非定型的 (non-programmed) ないし戦略的

(strategic) な意思決定とでは、それに対する支援システムの具体的な形態や内容にかなりの差があるのはいうまでもない。しかしここでは、日本の組織を念頭に置いて、定型的・非定型的の両方の意思決定に共通するものを概念化 (conceptualize) することを試み、DSS の設計・実施において本来あるべきシステムの発想 (systematic thinking) への橋渡しとなることを目的とする。

DSS 特集に当って

松崎功保・武田俊男

過去3年間にわたって5回ほど“デジジョン・サポート・システム・シンポジウム”を開催したことが契機となって、特集号の編集にたずさわりが、あらためてテーマの大きさと難しさに気がついた。そのために個別に各執筆者とお会いし、その後で全員が2回にわたって学会に集い長時間密度の高い議論を行なった。

実はその議論を公開することが最も読者の興味をそそり、かつまた本質的で有益なことがらが多いのであるが、オフ・レコを前提にしたもので残念ながら特集号には掲載されないことになった。しかし、各執筆者は十二分にその内容を踏まえて筆をふるっていただいているので行間にその熱気を感じとることができる。読者は執筆者のいわんとすることを十分に行間に読みとっていただければ幸いである。

今後多くの事例が開発され、さらに研究が進んだ段階で、また何らかの方法で発表されることを期待したい

1. 心的風土 (mental climate)

1.1 帰納思考から演繹(えんえき)思考加味へ

日本人の発想の特徴の1つは、具体的なことから出発して逐次抽象化の度合いを高めてゆく帰納思考に見られる。これは日本語の構造そのものに支配されてのことである。たとえば、長い形容語句を使用して名詞を修飾する場合でも、その形容語句を先に述べて具体的なイメージをもたせておいてから、名詞を持ち出してそのイメージをしめくくるという表現法を採る。“意思決定に役立つところの”システムというような具合である。

これに対して、ヨーロッパ語、たとえば英語では“a system which serves decision-making”というふうに、名詞を先に出して、それに対する修飾を関係詞 (relatives) を用いて敷衍(ふえん)

まつだ たけひこ 東京工業大学

大学院総合理工学研究科システム科学専攻